

目次

第一章 生き返った男

- 1 《Save Me》 9
- 2 傷痕 21
- 3 妻が明かす事実 33
- 4 俺はそんな人間じゃない！ 46

第二章 人殺しの影

- 5 開封された死 58
- 6 居場所はもうない 67
- 7 佐伯という男 79
- 8 遺伝子が泣いている 89

第三章 惑乱の渦中へ

- 9 不意打ち 99
10 母と妻 110
11 交わり 120
12 「人間だもの」 128

第四章 過去が明るみに

- 13 人が人を殺す時 137
14 誘惑者 148
15 幸福への抜け道 155
16 打ち碎かれた過去、そして未来 168

第五章 茫然自失

- 17 まったく身に覚えのない声 179

第六章

決定的な証拠

- 18 絶望的な反復 192
19 帰郷 203
20 生き残した人生 212

21 復生者たち 224

22 再生された空白 234

23 死後の世界 244

24 千佳の「秘密」? 255

第七章

楽園追放

25 反人間的な、あまりに反人間的な 265

26 「で、これの何が面白いですか？」 276

27 アダムとエヴァが、いなくなったあとのエデン

第八章

勝者なき戦い

28 死は傲慢に、人生を染める

297

29 どこにも痕のない咬み傷

308

30 氾濫する自画像

319

31 ゴツホ殺しの犯人

331

32 消された文字

339

第九章

真相

33 蘇る記憶

352

34 最後の一念

363

35 終点まで止まらない電車

375

36 生の麻葉

384

第十章 夢のような一時^{ひととき}

- 37 再出発 400
38 死者の居場所 406
39 幸福の手応え 417
40 隠しごと 430

第十一章 空白を満たしなさい

- 41 消えゆく命 440
42 言わずには、いられなかった 451
43 「空白を満たしなさい」 462
44 もう夜には後戻り出来ない 473
45 永遠と一瞬 487

空白を満たしなさい

どこにも痕あとのない咬かみ傷。

それらとも

お前は戦わなければならない、
ここから。

——
パウル・ツエラン

第一章 生き返った男

1 《Save Me》

病院の受付で、空白だらけの間診票を提出しながら、徹生は、「電話で先生に、事情は説明してありますので。」と言い添えた。

看護師は、「土屋徹生」という氏名を確認すると、改めて彼の顔を一瞥した。そして、「そちらのソファに掛けてお待ちください。」と言った。予め、医師から話を聞いている様子だった。

言われた通りに黒いソファに腰を下ろしながら、彼は、『——大丈夫、きっと助けてもらえる。』と、不安を押し殺すように自分に言い聞かせた。

それから、名前を呼ばれるまでの間、彼は広い待合室で、自分が一歳半の時に急逝した父親のことを考えていた。

彼の父、土屋保たむつが死んだのは、三十六歳の時だった。彼はそのために、昔からこの三十六歳という年齢を、自分の未来を照らす暗い星のように仰ぎ見ていた。

いつかは自分も、その歳を迎えることになる。それがまさしく、今年だということに、彼は先

ほど、問診票の年齢欄を前にして初めて気がつき、愕然としていた。

今この隣に、死んだ時の父が並んで座っていたならば、その父は、自分と同一年なのだった。

彼は、鏡を振り返るように、ゆっくりと、誰もいない傍らに目をやった。

父の存在が、突然、肌身に近く感じられた。写真で見知っている姿が、曖昧に脳裡に浮かぶのではなく、一瞬、肩同士が触れ合い、押し合うような、重たく生温かい感触があった。

そんなふうに父の存在を意識したことは、これまで一度もなかった。

どんな言葉を交わすのだろうか？ 普通に同一年の男と話すように喋って、会話は弾むのだろうか？……

徹生は、幽霊や死後の世界といったものを一切信じない人間だった。彼はそのことで、中学生の時には、級友と殴り合いのケンカまでしたことがある。

中学三年の時のクラスには、昼休みになると、いつも教室の片隅に集まって「こっくりさん」に興じる、妙なオカルト好きの生徒らがいた。その場所が丁度、徹生の席のすぐ後ろだった。彼はしばらく、それを無視していた。が、ある日店頭、我慢ならなくなつて、唐突に机を叩いて振り返ると、彼らに向かって、お前たちのやつてることはみんなインチキだと、真剣そのものの表情で言った。

十円玉が、聞き返すように、「は」という文字の上で止まった。参加者たちは頬を引き攣らせて、口々に、それは靈感の鈍いやツの僻みだとか、科学にもまだ証明できないことがあるといった、お決まりの反論をした。徹生は、押し返すように声に力を込めて言った。

「いいか？ 俺の親父は、俺が一歳の時に死んだ。けど、俺は親父の幽霊なんか、いっぺんも見たことないぞ！ もしあの世だとか、幽霊だとかが存在するなら、親父は絶対に、この俺の前に出て来とる。母親に会いに来とるわ！ けど、いっぺんだつて、俺は親父の幽霊なんか見たことないぞ！ 天国とか幽霊とか、そんなもんみんな、戯言だ。あつてたまるか！」

徹生の言葉に、そもそもこっくりさんを教室に持ち込んだ、青白いオカルト・マニアの級友は、それはオマエの父親の家族に対する思いが薄かったからだと理屈をつけた。

徹生が思わず手を出してしまったのは、その瞬間だった。

徹生は決して、ケンカつ早い男ではなかった。人を本気で殴ったのは、後にも先にもその一度きりで、スツとするどころか、心底嫌な気分だった。すぐに後悔したし、思い返す度に、いつも歯を食い縛つて、その光景が頭の中から消えるのを待たなければならなかった。

子供の頃は、彼も人並みに、オバケを恐がっていたはずだった。しかし、死んだ父親が出て来ると思ったことは一度もなかった。

母の恵子は、「おとうさん、しんでどこにいったん？」と訊かれると、空の上だとか、お墓の中だとか、或いは、遺された人の心の内だとか、色々なことを言った。徹生はその度に、なんとなくうれしくなつて納得したが、天国だとか来世だとかの話は耳にするようになると、父親はきつと、そういう世界にいるのだろうかと思えるようになった。

彼は毎日、布団に入ると、「おとうさん、おやすみなさい。」と、誰にも聞こえないように小声で言つてから目を瞑つた。しかし、父からは何の音沙汰もなかった。

ある時彼は、試しに、考えつく限りの悪口を言つて、しばらく反応を待つてみた。

もしその翌日に、例えば道を歩いていて、小さな石ころにでも躓いていたならば、彼はそれを一つの「しるし」として、一生信じ続けたに違いない。しかし、そんなこともないままに月日を経るうちに、いつとも知れず、父への就寝の挨拶も止めてしまった。それがつまりは、彼の結論だった。

徹生は、死んだ父が、遺された母と自分のことをどんなに深く思っていたか、それを知つて、いだからこそ相手を殴つた、というのではなかった。そうではなく、知ろうにも知りようがなく、ただ信じて、いるしかないことを否定されて、カッとなったのだった。

殴つたのは相手の顔だったが、本当は、言葉そのものを殴りつけたかった。

以後、徹生は金輪際、人と死についての話はしないと心に決めていた。そういう話題になつても、聴かないフリをしてやり過ぎしたが、考えそのものは変わらなかつた。

死後の世界は存在しない。幽霊も存在しない。人間は死ねば終わりで、あとには骨しか残らない。それは、よく角が取れた川原の小石のように固い彼の信念だった。

四年前に、徹生は囚らずも、もう一度だけ、死後の世界について、人と語り合う機会を持つた。高校時代の同級生で、互いの結婚式にも出席し合った友人の妻が、全身にガンが転移して、余命宣告をされた時だった。彼女はその時、まだ二十八歳だった。

見舞いに行つた病室には、生きるために必要な一切を乱暴に搾り取られてしまつたかのような、痩せ細つた彼女の姿があつた。

友人の話では、余命は四カ月で、残すところあと一月ほどしかなかったが、彼女はそもそも余命を、実際より三カ月長く医師に告げられていた。そういう配慮が患者のためになるのかどうか、彼にはよくわからなかった。

辛うじて起き上がって、ベッドの背に凭もたれていた彼女は、徹生に向かって言った。

「ねえ、てっちゃん、……人間って死んだらどうなるの？ 死後の世界ってあると思う？」

徹生は、彼女の表情を見つめた。その一瞬の、ほんの微かすかな笑顔のために、彼女に残された本当に貴重な命が、音を立てて燃えてゆくのが感じた。

「てっちゃんのお父さんも、早くに亡くなってるでしょう？ 天国から見守ってもらってるとか、……そういうの、感じたことある？」

徹生は、彼女から目を逸そらさないまま、

「うん、あるよ、やっぱり。いつも空の上から見守られてる感じがしてた。」と言った。

「本当？ 天国なの、それは？」

「天国なのか、何なのかはわからないけど、そういう世界だよ、きつと。」

「そっかあ。この人と違って、てっちゃんは、本当のことしか言わないから、わたし、信頼してるの。天国に行ったら、この人に内緒で、てっちゃんにだけこっそり信号送るね。」

「ヤキモチ焼かれて大変だよ。」

「いいの、いいの。いつもわたしがヤキモチ焼かされてたから。——子供には、わかるのかな？ それだけが心配。あの子、小さいから、まだ。」

「わかるよ、きつと。純粹だから、子供の方が。」

病院から帰る時、徹生は、玄関まで見送りに来てくれた友人に、泣いて感謝された。彼が涙を流すのを見たのは、結婚披露宴の最後の挨拶の時と、この時と、そして、丁度一月後の葬式の時の三度だけだった。

徹生は、あの時の嘘のことを後悔していなかった。

目の前で、懸命に死の恐怖に耐えようとしている一人の人間が、ただ天国を信じることだけを心の支えとしている。そんな時に、どうしてそれを「戯言」などと言えるだろうか？

それでも、「てっちゃんは、本当のことしか言わない」という彼女の言葉は、彼の中に重たく残った。

そしてやはり、彼の本心は変わらなかった。

父だけではなかった。現に彼女も、死後、彼に「信号」を送ってくれたことは、まだ一度もなかった。そして、それを待ち続けようという気持ちに、彼はどうしてもなれなかった。

「……いいえ！ あの人にはもう、梅干しはあげません。去年、せっかく分けてやったのに、あとで道で会っても、知らんぷりで、挨拶一つしないんですから。……」

平日の午後の待合室は閑散としていたが、一つ前に診察室に入った老婆が、ここ最近の生活を残らずすべて医師に語って聞かせていたので、徹生の名前はなかなか呼ばれなかった。医師は、少し面倒臭そうにその長話につきあっていたが、中断しないのは、自分に会うのを先延ばしにするためではないだろうかと訝いぶかられた。

老婆の話から耳を遠ざけると、彼は、向かいのソファに置かれたスポーツ新聞に手を伸ばしか

けた。そして、その広告欄の週刊誌の見出しに、息を呑んだ。

〈奇跡!? 死んだ人間が生き返った! 全国各地で続々と!〉

驚天動地の衝撃レポート 第一弾!!

落ちつきかけていた不安が、また昂じてきた。耳まで火照って、背中的一面から汗が吹き出した。

今ここで、自分が身を置いているこの平穩。孤独な老婆が、かかりつけの医師に、近所の主婦の礼儀知らずを、憤懣やる方ない調子で訴えている、この静かな日常。——やがてここにも、こんな世間の喧騒が、押し寄せて来るのだろうか? 自分は、好奇心いっぱいの見知らぬ人間にいきなり腕を引つ掴まれて、こんなふう尋ねられるのだろうか?

「——ねえ、今どんな気持ちですか?」

徹生は、その顔の見えない相手に対して、反射的に拳を握り締めた。昼休みの教室で、あの同級生を殴った時と同じように。気分を鎮めようと深呼吸をして、彼はポケットからiPodを取り出した。再生されたのはクイーンの《Save Me》だった。

フレディ・マーキュリーの歌声。目を閉じると、彼の脳裡には、あの日、病室で友人の妻の顔に認めた、命がチリチリと音を立てて燃えてゆく様が蘇ってきた。

大音量のコーラスで、「Save me!...Save me!...」と繰り返され、三度目にそれが叫ばれた時、彼は腹にグッと固い物を押し込まれたかのように目頭に涙を溜めた。

自分の中の一切が、崩れ出しかけていた。その最初の取り返しのつかない振動のように、目頭が痙攣し続けている。肩で必死に堪えると、彼は、筆り取るようにイヤフォンを外して、二回激

しく咳き込んだ。そして、目を拭^{ぬぐ}つて、もう一度、拳を額に強く押し当てた。その一点に意識を繋ぎ止めようとした。

『……俺はこんな人間じゃない。こんなふうなうろたえて、……何も悪いことなんかしてないだろ？ 恥じることなく、ただ、堂々としてればいいんだ。……』

落ちつくまで、しばらく待合室の窓から青空を見ていた。あまりに澄んでいて、むしろ見られているのは、こちらであるかのようにだった。そしてまた、気がつけば死んだ父親のことを考えていた。

彼の父、土屋保は、病院とはまったく無縁の、健康を絵に描いたような男だった。

子供の頃から柔道をしていたので、がたいが良く、勤め先の町工場では、よく昼休みに工員仲間にせがまれて、ラムネの栓を指で押し込んで開ける特技を披露したりしていた。

勤労感謝の日の祝日、保は、昼食に妻の作ったうどんを食べて、畳に寝転がっているうちに、そのまま心臓が止まって死んでいた。

妻の恵子は、台所で皿を洗っていたが、異変に気がついたのは、水を止めた時に、これまで一度も耳にしたことがないような、夫のいびきを聞いたからだだった。

不審に思つて見に行くと、保は仰向けで動かなくなっていた。居眠りでないとすぐにわかったのは、額が上の方から、刻々と真紫に染まってゆきつつあったからだだった。

大慌てで救急車を呼び、保は病院に搬送されたが、そのまま到頭、一度も息を吹き返さなかった。死亡診断書には、ただ素っ気なく「心停止」とだけ記されていた。所謂^{いわゆる}ぼっくり病だった。

父の心臓が止まった時、一歳半だった徹生は、その周りを、よちよち歩き回っていた。彼は母から、何度となく、その時の話を聞かされていたが、どうがんばってみても、頭の中には何一つとして浮かんで来なかった。

徹生の中には、いつも、まっさらな昼下がりの光があった。ほんの些さ細さいなことでもいい。何か少しでも父について覚えていることはないかと、彼はよく、その何もない光に目を凝こらした。その空白の奥には、居間があり、畳があり、ちゃぶ台があつて、満腹で昼寝をする三十六歳の男が一人、自分の身に起きたことが、何かさえもわからないまま横たわっている。

徹生はその瞬間を、いつも追うように、また待つように求めていたが、得られるものと言え
ば、どこからともなく染み出してきた、想像された死の光景ばかりだった。

台所で洗う物をする音。窓から差し込む十一月の陽射し。呼吸を止めた肺から抜ける空気の音。不吉な紫色に染まってゆく額。——何もかもが、あまりに母の言葉通りで、決してそれ以上でも、それ以下でもなかった。その紫色が、どんな色だったのか、そのいびきが、どんな響きだったのか、幾ら想像してみても、彼にはわからなかった。

そうして、彼の記憶以前のまっさらな場所には、自分で拵こしらえ上げたニセモノの父の死体が、そこかしこに打ち捨てられて、虚しく転がっている。

徹生にとって、父とはそんなふうに、ただ、母から聞かされた話だけが頼りの存在だった。

生きている人間は、日々活動して新しい。変化し、豊富になる。昨日とは違うことを感じて、

考え、行動する。それが今日、生きていくということである。

しかし、死んだ人間は、ささやかな幾つかの逸話の主人公として、何度でも同じ行為を繰り返すしかなかった。

父の話で一番印象に残っているのは、徹生の産まれた年のことで、筆無精で、普段は十枚も書かなかった年賀状を、この時ばかりは五十枚も買ってきて、「男児誕生！」と、知っている限りの人に書き送ったのだという。それは結果的に、父がこの世で書いた最後の年賀状となった。

徹生はそれで、自分の誕生日が、父を喜ばせた、ということだけは知っている。父の質朴な人柄を想像している。それが、直接の記憶はない父に対する、彼の愛情の拠り所よきところとなっている。

徹生にとって父とは、そうして、想起される度に、三十六年前の「男児誕生！」を喜んで、今もせつせと年賀状を書き続けている人間だった。たとえ、今の徹生の身に何が起ころうとも、父はそれを知ることにも出来ないまま、一人息子の誕生日に、ただ頬を緩めているだけの存在である。

そういう父を、徹生は儂よかく感じた。

父という人間に、何かこれだけは疑う余地のない「生きた証」と呼べるものがあるとすれば、それは結局、徹生自身だった。

子供の頃から、徹生と会う父の昔馴染ななじみたちは、皆が口を揃えて、似ている、と言った。

濃い両眉が、翼を広げてまっすぐ前に飛んでくる、一羽の鷹のようなかたちをしている。工場の誰かが言い出したことらしいが、それが生き写しだと笑った。どんなに柔らかな表情を浮かべていても、常に一所を見据みえているような強い印象があった、と。そして、保のことは、みんなが「やさしかった」と懐かしがった。徹生自身が人からそう言われる時には、その父の評判を思い

出した。

自分のついに知ることのなかった父の存在が、他でもなく、自分自身の中に紛れ込んでいる。徹生は、そのことを、窓にうつすらと映った影を見つめながら考えた。

『俺にとつては、息子の璃久りくこそが、『生きた証』だったんだらうか？　そして、その家族との絆さえ、今は断たれようとしている。……』

「——土屋さん、土屋徹生さん。」

受付の看護師に呼ばれて、徹生は鞆とジャケットを手に取り、立ち上がった。

診察室から出てきた老婆は、思いつめた面持ちの若い彼と擦れ違すうと、どこか疚ぐしそうな素振りすぶりで、そそくさと脇を通り抜けていった。

「どうぞ、そちらに。」

中には院長だけがいて、四角い銀縁眼鏡の奥から、徹生を注視していた。

一礼して椅子に腰掛けると、院長は、「私が、寺田です。」と、診察らしくなく最初に名乗った。徹生は、仕事のクセで咄嗟とつさに名刺を取り出しかけたが、思い直して同じように名前だけを言った。

色白で、鼻っ柱が磨いたように光っている寺田の顔は、どこことなく、ラベルの貼られた、透明の薬瓶を思わせた。丸い椅子が軋こむ音がした。

「電話でもお話しましたが、確かに三年前に、私は『土屋徹生さん』という方の遺体の検視をしています。ビルからの転落死でした。」

「僕が、その土屋徹生なんです。間違いありません。」

徹生は、きつぱりと言いつ切った。寺田は、神経質そうな瞬きまばたをした。

「どうしてそう言えるんです？」

「え？」

「証明できますか？」

徹生は、険のあるその尋ね方に、

「証明って、……僕は僕ですよ、そんなの。」と眉を擡ひそめた。

寺田は、首を傾かげた。そして、初めて徹生から目を逸らすと、ズボンについた白い糸くずを見つけて手で払おうとした。それが何度やっても取れないので、最後は指で摘つまんで、床ではなく、足許あしもとのゴミ箱に捨てた。その一連の動作に、徹生は妙な息苦しさを感じた。

「あなたは三年前に死んでる。——で、数日前に生き返ったと言うんですね？」

寺田は、顔を上げて改めて確認した。

「そう言っているのか、僕にも正直、わからないんです。混乱してて、……だからここに来たんです。僕はもちろん、生きてます！ この通り、……」

寺田は徹生を凝視していた。そして、小さく嘆息すると、

「とにかく、もう一度、整理して話してもらえますか？ 最初から、つまり、どういうことなのかを。」と言った。

徹生は、寺田の顔を正面に見据えた。そして、仕切り直すように「ええ、」と言うと、記憶に意識を集中させた。

あの夜の闇と静寂が次第に深まってゆく。一呼吸置いてから、彼はゆっくりと口を開いた。

2 傷痕

「……落ちる！」

真っ暗闇の中で恐怖に駆られた瞬間、徹生は、パイプ椅子の上で、前に傾いた体を跳ね上がった。
せた。

あの日、彼が目を醒ましたのは、会社の5階の狭い会議室だった。

水の泡が弾けるように、パツと瞼が開いて、曖昧に霞んだ視界に光が灯った。

最初に目に入ったのは、自分の両手足だった。グレーのズボンを掴んで、拳が二つとも握り締められている。

心臓が、肋骨の檻にぶつかりながら、出してくれ！と、叫んでいるかのように暴れていた。

顔を上げた先のホワイト・ボードには、「新しさと懐かしさ」という製品コンセプトらしい言葉が走り書きされている。下線を引いて、トンと最後に点を打つのは、部長のクセだった。

「……寝てたのか。……いつから？」

腕時計に目を凝らすと、なぜかガラスに罫が入っていて、針は3時14分で止まっている。どこでぶつけて壊したんだろう？ ブラインドの上があった窓には、室内にぼつんと一人残された彼の姿が映っていた。壁の時計は、10時を回っている。朝ではなく、夜だった。

しばらく考えてから、徹生は、頭を強く振った。何も思い出せなかった。額に手を当てて、何の会議だったんだろうと首を傾げて、「……アレ？」と、笑みを強張こわばらせた。

幾いら考えても、記憶は、今し方の目醒めの直前までしか遡さかのぼれなかった。

うたた寝の最後に訪れる、あの真つ逆さまに、奈落の底に落ちていくような恐怖感。

立ち上がると、頭の奥の方で、何かがぶつと破裂したように痛みが広がった。顔が歪ゆがんだ。眩暈めまいがして、目の前が、真つ暗なのか、真つ白なのか、見分けがつかないようにちかちかした。

辛うじてかたちを留めていた記憶が、この時に崩れて、混ってしまったような気がする。

死因は、会社のビルからの転落だった。それを知って以来、徹生は、あの「……落ちる！」という意識のことが、ずっと気になっていた。

自分はあるを、いつ感じたのだろうか？ 何の疑いもなく、目を醒ます直前だと思っていた。しかし本当は、それよりもっと前だったのではあるまいか？ 生き返る前の、むしろ死ぬ寸前の転落の最中だったのでは？……

徹生は、診察室で白衣の寺田と向かい合いながら、この会議室でのことをかなり詳細に語った。尋ねられたから、というだけでなく、寺田もきくと、この目醒め方に興味を示すだろうと信じ込んでいた。医師ならではの視点で、彼は、素人の自分が思いもかけなかったことを、指摘してくれるに違いなかった。

「……目が醒める直前は、真つ暗くらだったんです。けど、そのすぐ外側は、何か眩まぶしくちらついています。多分、現実の光だと思っんですけど、……」

徹生は、沈黙に背中を押されて話し続けたが、そこまで辿り着くと、忽然と行く手を失ってしまった。寺田は、明らかに関心のない様子で、相槌を打つことさえしなくなった。そして、もう結構というふうには、三色ボールペンを机の上でトン、トンと突いてから、

「要するに、うとうとして目が醒めたら、生き返つてた、という話なんでしょう？」と言つた。

「え、……ああ、そうです。」

口籠もる徹生に対して、寺田は、

「人間は、生き返つたりしませんよ。」と、冷淡に言った。「それは、あなたも理解できますよね？」

「それは、だから、……」

「いや、だからじゃなくて、わかりますよね？」

徹生は、その言い方に腹が立った。

「じゃあ、この僕は何なんですか？ 土屋徹生の遺体は、先生が検視したんでしょう？ 僕はその土屋徹生なんですよ！ 『わかりますよね？』じゃなくて、……じゃあ、僕が今、ここにこうしているのは何なんですか？ それを教えてもらいに來てるんじゃないですか。」

続けて更に何かを言おうとしたが、言葉にならず、もどかしく腕を動かすことしか出来なかつた。

寺田の目は、異様なものを前にしたように、眼鏡の奥で微動した。

「あのねえ、——いいですか？ 私は、この内科の病院の二代目の院長なんですよ。その上で、

もう十五年も、検案医として、警察の変死体の検視に協力してるんです。まったくの善意ですよ。」

それでわかるだろうと、寺田は傲然と口を噤つぶんだが、徹生には何が言いたいのか理解できなかった。寺田は、反応の鈍さに苛いら立った。

「あなたはここにおいて、私に向かつて喋しゃべってる。つまり、あなたは生きてるんですよ。私も否定しませんよ、それは。だとしたら、考えられることは一つしかない。三年前に私が検視した遺体は、あなたじゃなかったということです。違いますか？」

「じゃ、誰なんです？」

「土屋徹生ですよ。」

「だから、土屋徹生はこの僕なんですよ！ 第一、顔は、……覚えてないんですか？」

「だから！ 今言ったでしょう！ 十五年もやつてるんですよ、私は！」

三色ボールペンを乱暴に机に放り出すと、寺田は徹生を睨にらみつけた。そして、口を開こうとするのを制して、

「いや、待って！ あなた、変死体を見たことがありますか？ 変死体！」と、広げたままの右の掌てのひらを突き出した。

「いえ、ないですけど、……」

「ないでしょう？ 全然違いますよ、生きてる人間の顔と。」

「違うから、……何なんです？ その遺体の顔が、この顔だったかどうか、わからないってことですか？」

「違う！」と、寺田は、舌打ちした。「人の話を聴きなさい、あなた！ いいですか、私は、ですけどね、覚えてますよ、その遺体の顔を。十五年もやってるんですから！ 似てます、確かに。けど、同じじゃない。当然ですね？ あつちは死んで、あなたは生きてるんだから！ 整形なのか、他人の空似なのか、何なのか、私は知らないけど。——っていうか、あなたの魂胆は、そもそも何なの？ それを言いなさい。」

「魂胆？」

徹生は、困惑して聞き返した。

「あなたみたいに、自分は死んで生き返ったとか言ってる人間が、全国に他にもいることは、ニュースで見えて知ってますよ。ハッキリ言いますがね、非常に不愉快ですね、私は。人をからかって、面白がってるんですか？」

徹生は、興奮の熱で脈絡が溶けてしまったような寺田の言葉から、初めて彼の動揺を察した。単に胡散臭いというだけではなく、自分は恐がられている。そうした村度が、一瞬、差し水のように、徹生自身の苛立ちを鎮めた。そして、自らの無害さを証す必要を感じた。

「魂胆なんてないです。ただ、知りたいだけなんです。他の人のことはわかりません。とにかく僕は、会社で目を醒まして帰宅したら、妻に、あなたは三年前に死んでると言われたんです！ 先生、自分の身に置き換えて、想像してみてください。……最初は、妻がおかしくなったんだと心配しました。それから新聞の日付を見て、手紙の消印を見て、雑誌をひっくり返したり、テレビをつけたり、……それでも信じられませんでした。けど、一歳だった息子が四歳になってたんです。何を疑っても、僕はこれだけは疑えません。あの子はニセモノなんかじゃない。親だけ

ら、それはわかります。」

「じゃあ、その三年間、あなたはどこにいたんですか？」

寺田はまた三色ボールペンを手に持つと、赤い芯を出したり引っこめたりしながら、不機嫌そうに言った。

「それは、……わかりません。記憶がないんです。」

「つまり、こうでしょう。あなたじゃない誰かが、三年前に土屋徹生として死んだ。私はその遺体の検視をしたことになってる。——いいでしょう。丁度そのタイミングで、あなたは失踪するか、拉致されるかして、どこかで生きてた。北朝鮮か、闇の組織か、そんなのですか？　まア、いい。それで今、その間の記憶を失って、家族の許に戻ってきた、と、そういう話ですね？」

「北朝鮮とか、そんなのは知らないですけど、……もしそうなら、三年前に僕が死んだ時に、泣いて悲しんだ妻や母親はどうなるんです？　通夜にも葬儀にも、僕の遺体があったんです。それはみんなが見ています。」

寺田は、口を噤んで、こめかみを膨らませた。そして、ふと、何かを思いついたように顔を上げると、

「あなた、双子の兄弟はいますか？」と尋ねた。

「……は？」

「双子です。あなたとまったく同じ、一卵性双生児の。」

徹生は、ようやく質問の意図を理解して、

「いえ。一人っ子です。」と否定した。

診察室の潔癖な白さが、寺田の白衣に照り返されて目に滲しみみた。

「先生を騙だまそうとか、そういうのじゃないんです、決して。それだけは信じてください。そんな馬鹿なことがあって、僕だって思いますよ。思いますけど、……」

そう訴えている途中で、徹生は寺田が、頻しきりに自分の口許を凝視しているのに気がついた。食べ物でもついているのかと、手で拭いながら、その感触に目を瞠みはらした。

「そうだ、この下唇の傷の痕あと、覚えてませんか？ 高校の柔道の時間に、受け身を取らずにがんばり過ぎて、顔から畳に突きつ込んで出来た傷です！ 前歯が貫通して五針も縫ぬって。これですよ！ こんな傷、僕以外にないですよ！」

徹生は下唇を指で摘んで、引っぱって見せた。寺田は、喰い入るようにそれを見ていた。その一点を頼りに、徹生の顔に、もう一度、記憶の中の顔を重ねようとしていた。

「覚えてるんじゃないですか？」

寺田の目は、急に虚ろになった。無意識らしく首を捻ると、聴診器が掛かっているうなじの辺りを搔かいて、何か独り言を呟いた。そして、徹生の問いには答えずに、

「——奥さんは、『泣いて悲しんだ』と言われましたか？」と探るように訊いた。

徹生は、「え？」と、今までとは違う戸惑いを見せた。

「そうは聞いてないんじゃないですか？」

「直接、そんな話をしたわけじゃないですけど、夫が急に死んだんだから、……いや、わかっています、先生の言わんとするところは。三年という時間は、……それは、短くはないです。何かが終わって、新しい何かが始まるには、多分、十分な長さです。」

思わず口を突いて出た言葉だったが、徹生が、自分の不在の間の妻の生活について考えたのは、この時が初めてだった。そして、ここ数日の不安の一端を、ようやく正視した気分だった。あれほど笑顔の絶えなかった彼の妻は、ここ数日間、まったく笑わなかった。それは恐らく、混乱のためだけではなかった。

自分が生き返ったことを、妻は喜んでいるはずだ。——どうしてそう無邪気に、信じられるだろうか？……

寺田はしかし、徹生その言葉にやや意外そうな顔をした。

「そういう意味ではなくて、——いや、そういう意味もあるかもしれませんが、それより、夫にああいう死に方をされると、ということですよ。」

徹生は息を呑んで、背中を真っ直ぐにした。実際、彼の心を重たく占めていたのは、その問題だった。

「僕は転落死っていう死因が、どうしても信じられないんです。会社のビルの屋上からと聞いてますけど、あんなとこ、行く用事もないですし、……考えられない。会社のみんなだって、おかしいと思っただけです。」

「奥さんは何と？」

「妻は転落死としか言いません。先生はさっき、『ああいう死に方』と言われましたけど、僕はその、ひょっとして、……誰かに殺されたんじゃないでしょうか？」

徹生は、身を乗り出して、真剣に尋ねた。寺田は何度も素速い瞬きをすると、また徹生の下唇の傷を見た。そして、やや間を置いてから、ただ、「転落死です。」とだけ言った。

「いや、おかしいですよ、それは。……実は、心当たりがないわけではないんです。」

徹生は、まだ妻にさえ言っていないことを思いきって口にした。

「あいつが犯人じゃないかって男が一人いるんです。」

寺田はしかし、その話には関わるつもりがないというふうには、急に拒絶の態度を露にした。

「それは私に話すことじゃないです。私からは何も言えません。そもそも私は、あなたが、あの遺体と同一人物だと思っていませんから。死因については、彼の、プライヴァシーがあります。どうしても確認したいのであれば、警察に行ってください。」

そう言うのと、面倒事を早く切り上げようとするように、聴診器を耳に掛けた。

「上衣を捲まつて、お腹を見せて。」

「え？」

「お腹。」

徹生は、言われた通りにした。前からと後ろからと、冷たい聴診器を当てられ、血圧を測られて、目の下と口の中とを見られた。

ステレンス製の舌圧子をビーカーの中に入れてみると、寺田は、急に疲労に堪えられなくなったような面持で言った。

「私に言えることは、あなたがちゃんと生きていて、ということだけです。逆行性健忘が見られますから、内科よりも精神科を受診した方がいいでしょう。」

寺田医院まで夫を迎えに行く車の中で、土屋千佳は、どうしてこの子は、さつきあんなことを言っただらうと、後部座席のチャイルド・シートに座る璃久を、ミラー越しに見遣った。

「——はい、りっくん。きをつけて。」

璃久を拾いに立ち寄った保育園のことだった。若い担当の保母は、背が高く、いつもスモックの袖を肘の辺りまで捲っていて、千佳は彼女という、何よりもまず、その白い、ほっそりとした腕を思い出した。

璃久は、自分で靴を履いて、爪先で地面を蹴ると、

「りっくんね、これから、おとうさん、おむかえにいくんだよ。」と言った。

「——おとうさんを？」

「うん、そう。」

「そう。よかったねえ。」

千佳は、極親しい友人夫妻にしか話していない徹生のことを、璃久が唐突に口にしたのに慌てた。しかし、若い保母は、微笑みを湛えたまま、璃久から視線を逸らさず、それに気づかないふりをした。訝る様子も見せなければ、尋ねようとしてもしなかった。よくあることとして——恐らくは、新しいおとうさんのことと理解したのだった。

「はい、じゃあ、またげつようびね、りっくん。おひるねのねまき、わすれないように。さようなら。」

「さようならー。」

千佳は、璃久の手を握ると、何事もなかったように挨拶する保母に、一礼した。

そつとしておいてもらう。それこそは、千佳がこの三年間、何よりも人に求めてきた優しさだった。どれほど自分たち親子が、世間の通例からは外れているとしても、特別扱いされることは苦痛だった。憐れみに反発するというのはなく、彼女はただ、目立ちたくなかった。優しさを引き替えのあれやこれやの詮索に、彼女は幾度となく、不用意に傷ついてしまった。元々、友達も多くなかった彼女は、今では完全に孤独に慣れ親しんでいた。

——そしてある日、三年前に死んだ夫が帰ってきたのだった。

あの夜、千佳は、何が起きたのかも、目の前に立っているのが、本当に徹生なのかどうかもわからないまま、ただ首を横に振り続けていた。

平日の遅い時間だったが、徹生の死後も、何かと親切にしてくれていたデイスカウント・ショップの秋吉夫妻を電話で呼び出し、そのまま朝まで付き添ってもらった。

徹生よりも六歳年上で、生前、兄のように慕っていた秋吉浩一も、最初は言葉も出ないといった様子だった。それでも、一晩話し込んで帰宅する頃には、

「千佳ちゃん、何がどうなってるのか、わからないけど、とにかく、徹生君が帰ってきたんだよ。喜ばないと。」と靴を履く玄関先で、励ますように言った。

千佳は言葉を返すことが出来なかった。居間にいるのは、やはり夫なのだと思った。そして、「喜ばないと。」と言われて、初めて彼女は、自分が、その事実を喜んでいないと、気づかせられた。

千佳は、明るくなるまで一睡もしなかった。そして、目を醒ました璃久には、「おとうさんよ。」と言ってやれなかった。

「おとうさんをおぼえてない、りくく？」

膝を突いて呼びかける徹生に、璃久は曖昧に首を捻って、助けを求めるように母親の足許に駆け寄った。徹生が三十二歳で急死した時、璃久はまだ一歳になったばかりだった。

「りくくんのおとうさん、てんごくにいるんじゃないのお？」

千佳は、息子の頭を撫でてやりながら、ただ、「——ね？」とだけ頷いた。それ以上は、何も言葉が出て来なかった。

徹生はそれから、毎日璃久に話しかけ、抱き上げようと手を差し伸べていたが、璃久は嫌がって逃げ回るだけだった。

その璃久が、どうしてさつきは、あんなに自然に、「おとうさん、おむかえにいくんだよ。」と言ったのだろうか？ 内心ではもう、生き返った徹生を、父として受け容れているのか？ それとも、他の子供たちが、いつもそう言っていたのを、ずっと羨んでいて、一度、真似してみたかったのだろうか？……

病院の駐車場に車を止めながら、ここに来てはまだ、千佳は思い迷っていた。

もし帰って来たのが本当に徹生なら、話さなければならぬことがあった。しかし、それに触れたならば、二人の関係は、今度は生きたまま永遠に絶たれてしまうのかもしれない。それが恐かった。言わずにいる苦しみは、彼女の中で、もうとつくに限界に達していたが。

病院を出た徹生は、すぐに車に気がついた。千佳は、フロントガラス越しに彼を見ていた。微笑みを浮かべようとして、浮かべきれなかった彼女の正直さに、哀しさとうれしさとの両方を感

じた。

三年という時間は、確かに彼女にとって、長かったはずだった。今、彼女の一番近くにいる人間は、自分ではないかもしれない。——その予感、診察室にいた時とは違って、今は胸の内側に静かに切り傷をつけてゆくような痛みとなっていた。

千佳は、シートベルトを外すと、車から降りて、歩み寄ってくる徹生を待った。

「ありがとう。……ちゃんと生きてて、健康だって言われたよ。」

徹生がそう言うと、千佳は微かに頷いて、彼の顔を見上げた。

「……俺は俺だよ。土屋徹生だよ。」

千佳の目は赤く潤いかけた。しかし、涙は流れなかった。

ゆっくりと手を伸ばすと、千佳は、人差し指と中指の先で、徹生の下唇の傷痕に触れた。

あの日以来、二人はまだ一度も、互いの体に触れ合っていないかった。

その温もりと弾力の一点が、徹生に、ようやく生きていもたらるという実感を齎した。

3 妻が明かす事実

マンションの4階で、エレベーターのドアが開くと、隣の家の“カプチーノ”というチワワが、尻尾を振りながら駆け寄ってきた。

「おお！ 元氣だったか!？」

徹生は、思わず声を弾ませた。彼にとつては数日ぶりの再会だが、実際には三年経っている。動物相手だからなのか、そのギャップの計算が、この時には自然と感情に結びついた。しゃがみ込むと、よしよしと顎の下を指でくすぐり、頭を撫でてやった。

璃久は、天敵を目にするなり、「うえつ、」と尻から後退ちとずさつて千佳の足にぶつかった。

「ん？ りくはいぬがこわいの？ こんなちっちゃいのに。かわいいよ、ほら。」

淡い茶色い毛に覆われたカプチーノの白い顔は、その名の通り、コーヒーカップにきめ細やかに泡立つミルクに、ココアパウダーで描かれているかのようなだった。

千佳は、いつものことという感じで、「だいじょうぶ。おとうさんがちゃんとおさえてくれるから。」と促した。

璃久は、千佳の尻を楯のように自分の前に構えて、廊下の壁に貼りつきながら忍び足で歩いた。その間、一瞬たりともカプチーノから目を離さなかった。

徹生は、千佳のそのさりげない「おとうさん」という一言に、表情を明るくした。そして、息子のあまりのへっぴり腰に苦笑した。

カプチーノは、徹生の太ももに爪を立てて前足を乗せていたが、いつものように吠え散らすわけではなく、どことなく生気のない目で、長い舌から澄んだよだれを滴らせていた。

徹生の手は、既にそのよだれ塗まみれになっていた。そして、鼻を突いたその異臭に、吐き気を催しそうになった。

「お前、何食べたんだ？ ん？ モテないぞ、こんな口臭じゃ。」

徹生は、カプチーノの眉間を親指で撫でてやりながら顔を覗き込んだ。

やがて、「カプちゃん、……こつち。」という声があった。ドアから顔だけを覗かせている隣の奥さんに、徹生は軽く頭を下げた。初めて彼と再会した彼女は、よろよろしながら戻ってきた飼い犬を抱き上げると、逃げ隠れるようにドアを閉ざした。

「……またビックリさせちゃったよ。」

自宅の鍵を探す千佳は、歩み寄ってきた徹生に、

「手、洗わないとね。」と言った。

「すごい悪臭だよ。どうしたのかな？」

「歯槽膿漏だって。言おうと思っただけど。」

「歯槽膿漏？ 犬にもあるの、そんなの？」

「あるんだって。カプチーノも、もうかなりのおじいちゃんだから。」

「ああ、……そっか。犬の三年だからね。」

洗面所で手を洗ったが、石鹸の香りの奥には、まだ先ほどの臭いが染みついていた。徹生は、苦笑しつつも、人間とは違って、あんなに無邪気に喜びを露にしたカプチーノに愛着を感じた。まるで、何事もなかったかのようにであり、多分、あの犬にとっては、何も起きてはいないのだった。『それにしても、犬の記憶ってのは、どうなってるんだらう？ 俺が俺だと、ちゃんとわかって、しかも、人間みたいに、三年前の俺と、そっくり同じ別人なんじゃないかなんてややこしいことは考えないんだな。……』

居間に戻ると、テーブルの上には、千佳が昔からよく作っていた豆腐のサラダと地元の梅を使

ったドレッシングが置かれていた。

適当にちぎられた黄緑色のみずみずしいレタスの上に、濃い緑のワカメが広げられ、更にその上に、絹ごしの、ババロアのように艶々した豆腐が盛られている。鯉節とちりめんじゃこ、刻み海苔がトッピングされ、丸いガラスの器に沿うようにして、櫛切りくしぎにされた真つ赤なトマトが、炎を上げるように元気良く並んでいる。

何でこんなにおいしそうに盛りつけるんだろうと、腹を空すかせた徹生は改めて感動した。何を作ってもそうだった。結婚する前から、時々料理を作ってもらっていたが、彼は千佳が、きつと無理をしているんだらうと氣遣って、一度、「どうせ崩して食べるんだから、いいよ、適当な盛りつけで。」と言ったことがあった。千佳はそれに、信じられないというふうに目を丸くして言った。

「この一手間が、楽しいのに！」

いつも座っていた席について、徹生は、唐揚げを揚げる千佳の背中を見つめた。

俯うつむき加減きげんの華奢きゃしゃなうなじが、台所の明かりを一点に集めたように白く浮き立っている。背中でキュッと紐を結んだエプロンは手作りで、溜ためまっていた色々な予備のボタンが飾りとして縫いいつけてあって、遊びに来た秋吉さんの奥さんから、「かわいいー！」と、甚いたく感心かんしんされていた。

そうした彼女の変わらなさは、部屋の中の変わってしまつたことを、却かえって強く意識させた。取り分け彼は、テレビ台の上の二人の新婚旅行の写真が無くなつていることを気にしていた。病院から戻ってきて、彼が一番に確認したのは、そのことだった。

トイレから走って戻ってきた璃久は、水色のタオルケットを、マントのように首に巻いて靡かせていた。千佳が妊娠してすぐの頃に、早々と、徹生がデパートで買ってきたもので、それにくるまって寝ている璃久を眺めることが、残業で夜中に帰宅する彼の何よりの心の安らぎとなっていた。

たった数日前までは、まん丸に膨んだおしめを、数時間置きに替えてやっていたあの璃久が、三年後のこの璃久なのだった。一歳の五月の節句の時には、兜と一緒に写真を撮ろうとして、何度カメラを構えても、笑ってこちらに歩み寄ってきてしまったあの璃久が、この璃久なのだった。不思議だったが、それでも徹生には、なぜか、その二つの璃久が同じであることが、カプチーノが自分と会った時のように、すぐに信じられていた。

璃久は、マントの裾を頭から被って、「わーっ！」と、唐揚げを揚げている千佳にぶつかって行った。

「こちら、あぶない。おりょうりちゅうは、だめよ。」

「おかあさん、おなかすいた。」

「もうちよつとだから。なんなの、そのへんなかつこうは？」

「おばけ！」

千佳の呆れ顔に、璃久は奇声を上げて徹生の脇を走り抜けて行き、焦げ茶のソファにダイヴした。そして、足をばたつかせながら一頻り笑い転げると、急に飛び起きて、徹生の知らない最近のウルトラマンと、腕がハサミになっている怪獣とを手にとって、キックさせたり、パンチさせたりし始めた。

何もかも忘れて、今のこの生活をそのまま生きる。それはやはり無理なのだろうか、徹生は考えた。忘れてしまっていることは、忘れたままそっとしておいて、ただ何事も無かったかのようになり、四歳になった璃久と、三十四歳になる千佳、そして、三十六歳になる自分を受け容れるということは……

璃久は、二体を空中で戦わせながらソファを乗り越え、食卓の自分用の高い椅子に座った。

「ぴしゅー、……あぶない、……ぐぐぐぐぐ、ばーん。」

「それは、なんてウルトラマン？ おとうさんもこのころ、みてたんだよ。」

そう言っ、徹生は、その二体のファイギュアに手を伸ばそうとした。璃久は、獲られまいとするように、さつと脇に隠した。

「おとうさんにもみせてよ。」

「やだよー。」

「ちよつとだけ。とらないから、……」

「やだ！」

璃久は頑かたなだった。そして、椅子の手すりに怪獣を立たせて、またウルトラマンに攻撃させた。胸にキックが命中すると、ぴゅーつと怪獣は転落したが、すぐにまた生なき返かえつて、ウルトラマンに反撃した。

徹生の目からは笑みが消え、ただ笑顔の形だけが残った。

璃久は、生き返った怪獣をウルトラマンで執拗に痛めつけた。その乱暴さは、次第にエスカレートしていった。ファイギュアを壊してしまいそうなほどだった。徹生はようやく、それは何か、

子供なりの表現なのではないかと勘づいた。

「りく、……」

声を掛けると、先回りするように、揚げたての唐揚げを運んできた千佳が、「だめよ、りっくん。こわれるでしょう。」と窘めた。

「びしゅー、……ぱーん。」

「そんないじめっこみたいなウルトラマン、やだな。やさしくないと、いたい、いたいって、かいじゅうさん、かなしんでるよ。」

「……ぱーん。」

璃久は、最後に一発、ウルトラマンに触れる程度のキックをさせてから、ポイト二体をテーブルに投げ捨てた。唐揚げの皿を置いた千佳は、よしよし、と人差し指で怪獣の方を撫でると、二体を握手するような格好で柵に立たせた。璃久は、母親を見つめ、自分ではまずしないようなその意外な二体の並べ方を、しばらく眺めていた。

なめこの味噌汁が注がれると、「いただきます。」と三人で手を合わせた。

徹生は、音を立てて唐揚げの衣を噛み締めたが、照り輝くような肉の隙間から、勢い良く油が染み出してきて、舌を火傷しそうになった。「熱っ！」

豆腐サラダを皿に取り分けていた千佳は、「大丈夫？」と心配した。少し笑った小さな口からきれいに並んだ白い歯が覗いた。その明るい表情に消えてほしくなくて、徹生は、口に空気を送り込みながら、もっと熱がってみせた。

「大丈夫だけど、……熱っ、……なんか、ビールとか飲みたくなるね。」

「あるよ。飲む？」

「そうだね。千佳も飲むよね？」

「あ、うん。」

徹生は、弾むようにして立ち上がって、台所から缶ビールとグラスを取ってきた。二人分を注ぎ分けて、泡が落ちつくのを待つと、特に深い考えもないまま乾杯しようとした。そして、何に、という名目を考えてしまった。

千佳は、徹生の様子を察して、

「てっちゃんが生きてたことに。」と言った。

「……乾杯。ありがとう。」

徹生は、璃久の方を振り返ると、

「りくもかんぱいしよつか。」とグラスを差し出した。

璃久は、そっぽを向いて、泣き出しそうな顔で千佳を睨んだ。

「りっくん、じゃあ、おかあさんとかんぱいしよう。はい、コップもって。かんぱーい。はい、かんぱーい。……」

璃久は、しばらく指を咬んで迷っていたが、やがてオレンジジュースのコップを手にとると、かちんと音を立てて応じた。

食後、千佳が璃久を風呂に入れて寝かしつけるまでの間、徹生は、金曜の夜の情報番組で、彼と同様に「生き返った」という仙台の少女が、家族と一緒にインタビューを受けているのを眺め

ていた。

「事故に遭^あった時のことは、覚えてますか？」

「部活のみんなと信号を待ってて、そしたら、急に車が突っ込んできて、……」

「轢^ひかれた、というのは？」

「いえ。……ただ、アツて感じで、……」

「自分がその時に亡くなってたってことは、どうか、信じられる？」

座布団に座って、首を振る少女の手を、傍らで母親が握り締めている。反対隣には、徹生より少し年上くらいの父親が、背中を丸めて、俯き加減で胡座^{あぐら}をかいていた。

ビール缶に口をつけていた徹生は、その縁を軽く歯で噛んだ。

「お父様は、娘さんに再会された時は、どんなお気持ちでした？」

「それは、……言葉に出来ないです。こんな奇跡が起こるなんて、想像もしてませんでしたし。」

……ただただ、うれしい。その一言です。」

画面右上には、「交通事故死の少女、奇跡の生還!？」という文字が躍^{おど}り、左上には、スタジオの芸能人らの顔が映し出されている。

「今、一番、何をしたいですか？」

最後に少女が、改めてアップで映された。二つ結びにした黒い髪。おでこのにきび。左右の揃わない一重まぶた。半開きの口。……

「うーん、……またプラスチックバンドに戻りたい。クラリネット吹きたいです。」

「新しいクラリネット、買わないとな。」

父親は、はにかむような娘の手を甲から握ると、約束を確認するように言った。

『——この子は、正直に喋ってる。』

徹生はそう感じた。この無垢な表情が嘘だというのなら、この世の一体、何を信じればいいのか？

「あの子をよく見てください！ 本当にあの子が、嘘を吐いていると思うんですか？」

今日の病院でも、そう言えさえすれば、どんなに説得力があったことか。……

もし仮に、この少女が、世界中から爪弾きにされたとしても、彼女の両脇に座っている両親だけは、断固として、その言葉を信じるに違いなかった。彼らにとって、娘が生き返ったことは、「ただただ、うれしい」ことなのだから。

徹生は、握り締められた少女の手を見つめながら、無意識に鼻を掻いた。その指には、まだあの隣の犬の臭いが微かに残っていた。

千佳が、濡れた髪を撫でつけて居間に戻ってきた時には、9時を回っていた。

普段から薄化粧だったが、湯上がりの火照った白い頬には、それでもやっと素肌になれたという解放感があった。幾分張った左右の顎が、細い首に静かな影を落としている。以前は気にして、よく鏡の前で、髪で隠してみたり、手で覆ってみたりしていたが、その時の彼女の、さも残念そうな顔が、徹生には、何とも言えず愛らしく感じられていた。所謂「美人顔」ではなかったが、彼女が働く駅の土産物売場では、杖をついたような年配の客に、「べっぴんさん」と評判が良かった。

徹生は、水の入ったコップを持った千佳に、

「三年の間に、千佳がまた、すごく母親らしくなっていて、ビックリしてる。」と言った。

千佳は、テーブルを挟んで、徹生と向かい合わせに腰を下ろすと、「そう？」と言った。

「うん。さっきの璃久への注意の仕方とか見ても。」

「いい子よ、りっくん。」

「それは、そうだよ。俺と千佳の子供なんだから。」

徹生は、曖昧な笑顔を見せた彼女に、しんみりと言った。

「俺は側にいてあげられなかったけど、すごくちゃんと璃久を育ててくれてて、……本当に感謝してる。ありがとう。……自分のことで頭がいっぱいになってたけど、一番にそのことを言うべきだった。」

千佳は、つと顔を上げると、十秒間ほど、徹生の目を見ていた。そして、一言だけ、

「本心？」と尋ねた。

徹生は、虚を衝かれたように、

「もちろん、本心だよ。」と言った。

千佳は、その返答について考えている様子だったが、一旦話を逸らすように言った。

「女の子だったら、また違ってたと思う。母と娘は難しいから。自分の子供の時と、りっくんはやっばり違うから、逆に良いのかなって思う。」

「かもしれないね。俺は、親父がいなかったから、男の子を育てるのは、不安でもあったし、すごく楽しみでもあったけど。……今はまだ、どう接すればいいかわからない。」

徹生がそう言うと、千佳は体を強張らせて、突然、吹き出すような顔で下臉を膨ませた。それは実際、笑っているのか、泣こうとしているのか、わからないような顔だったが、閉じ合わされた口唇は、ずっと小刻みに顫え続けていた。徹生は、驚いて彼女を見つめた。

「ごめん、……やっぱり無理かも。……ご飯の時は、このまま、またてっちゃん元の生活に戻れるかもしれないって、一瞬思えたけど、……無理そう。……」

千佳は首を横に振ると、苦しそうに嗚咽を我慢した。駐車場の時と同じで、涙は兆すばかりで、出口を塞がれてしまっているかのようだった。徹生は、その言わんとするところを察した。込み上げてきた哀しみに、なかなか決心がつかなかったが、その先は、こちらから言つてやるべきだと覚悟を決めた。そして、長い沈黙のあとで口を開いた。

「……わかっている。三年もあれば、……それは、誰だって色んなことがあるよ。」

「俺の壊れた時計とは違って、千佳の時計は、その間もずっと動き続けてて、……だから、……その、もう始まっているんだよね、新しい人生が？」

「——どういう意味？」

「誰か、……つきあっている相手がいるんじゃない？」

千佳は、眸の奥で怒りが弾けたような、哀れむような目で徹生を見た。そして、「……いない、そんな人。」と首を振った。

「俺も今後のことを考えたいし、千佳の気持ちも大事にしたいから、……本心を聞かせてほしい。今つきあつてなくても、好きな人がいるとか、……そうじゃなくても、もう俺からは、心が

離れてしまつてるとか。……」

彼女は、押し殺したように息を吐いてまた頭を振つたが、俯き加減の口許は、「……違う、」と、苛立たしげに動いたように見えた。

二人とも、しばらく黙っていた。

「俺の思いは、もちろん、まったく変わつてないよ。千佳のことも、璃久のことも、俺は本当に、この世の中で一番大事だと思つてる。出来ることなら、死ぬ前と同じように結婚生活を続けたい。それは、……」

「ごめん、……」と、千佳は遮るように言うと、「ごめん、……わたし、てっちゃんを、どう信じていいのか、わからない。」と口唇を噛み締めた。「自分の気持ちに正直になれって言われたら、……無理かも、やっぱり。自信がない。……三年間ずっと、苦しんできた。てっちゃんが側にいたら、わたし、また苦しくなりそう。」

千佳は、握つた手の親指と人差し指とを擦り合わせながら、徹生を見つめた。

「千佳、わからないよ、何を言おうとしてるのか。」

「結婚する時、約束したよね？ 一生、一緒にいようって。絶対に幸せになろうって。……違う？ 辛いこと、何でも話し合つて、助け合つていこうって。」

「約束したよ。今でも、そう思つてる。」

「ウソ！……やっぱりわたしのせい？」

「ウソって、……何？ はっきり言つてくれ。何を言おうとしてるんだよ？」

徹生は、当惑した。

「本当にわからないの？」

「わからない。」

「死んだ時のこと、何も覚えてないの？」

「覚えてない。……けど、」と、彼は、躊躇ためらった後に、「俺は事故じゃないと思ってる。病院でも考えてただけど、もしかしたら、——殺されたんじゃないかって、……」

「違う！」

千佳は鋭く首を横に振ると、到頭、堪えきれなくなったように叫んだ。

「違う？」

「違う。……いい、てっちゃん！」

「……何？」

「てっちゃん、自殺したの！」

徹生は、ピタリと体の動きを止めた。突然、目の焦点を断ち切られたかのように視界が曖昧になった。

「自殺したの！ 自分で会社の屋上から飛び降りたの！ わたしと璃久を置いて！ どうして？
なんで自殺したの？ 教えて、どうして！……」

4 俺はそんな人間じゃない！

「自殺するほど悩んでたことがあったんだったら、——そんなに苦しかったのなら、どうして話してくれなかったの？ わたしにも言えないようなこと？ それとも、……わたしだから言えなかったの？ わたしが原因？ お願いだから、大丈夫だから、正直に話して。てっちゃん、それを伝えるに戻ってきたんじゃないの？」

「冗談じゃない！ なんて俺が自殺なんかしなきゃいけないんだよ！」 徹生は、ようやく引き攀つたような顔で言った。「誰がそんな馬鹿なことを？」

「警察。」

「警察は転落死って言うてるんだらう？」

「転落死で、事件性はない。——だから、事故か、自殺かのどっちかだつて。」

「で、何で自殺になるんだよ？ 事故死も不自然だけど、自殺なんて、もっとヘンだよ。考えたこともない。大体、証拠は？」

千佳は黙って立ち上がると、食器棚の引き出しの一つを漁った。

取り出してきたのは、徹生の黒い手帳だった。もう何度となく見返しているらしく、手の中で、誰かが手伝っているかのように、勝手にメモのページが開いた。

千佳の面は、赤らんだ目だけを残して蒼白になった。徹生の顔を見て、もう一度、その箇所を目を落とすと、口を強く結んで彼の前に差し出した。

ページの真ん中には、罫線を何段も跨いで、ただ一言、「いやだ」と記されていた。

一画一画から、齒軋りの音が聞こえてくるような字だった。何かに対して懸命に抵抗している。しかも発せられるや、すぐに否定されたらしく、その言葉は、激しく往復する線で、塗り潰

されていた。

強い筆圧を留めた紙は、どこか人肌のように、ページを捲くと、その下にも、更にその次のページにも、「いやだ」という叫び声の銜こたまが響いていた。

彼は、黒いボールペンで記されたその文字に指で触れてみた。三年経っても、押しつけられたペン先のあとは、まだ減り込んだままである。

人間は嘘を、決してこれほどの力で書ききることは出来ないだろう。どの一画にも躊躇うところがあった。本心を試され、それを、あらん限りの力で証そうとしているかのように、緊迫していて、必死だった。

徹生は、体の深いところから、暗い戦慄が湧き起こってくるのを感じた。

「……何がいやだった？」

千佳は、手帳を見つめる徹生に尋ねた。

「三年間、わたし、ずっと考え続けてきた。——仕事のこと？」

「違う。」

「やっぱり、わたし？」

「違うよ！」

徹生は、強く否定した。

「何言ってるんだよ！ 大体、これが遺書？ こんな、……いや、違う、俺、書いてないよ！俺の字じゃない！ こんな、……おかしいと思わなかった？ 俺の字？」

「てっちゃんの字に見えた。」

「は？……こんなの、……」

徹生は捲れかけたページを乱雑に手で押さえて、もう一度、その三文字を見つめた。——誰かが自分になりすましている。自分に成り代わって、まるで自分のように言葉を発している。その不気味さに、彼は身を震わせた。

「絶対に違う！ これは俺じゃない。」

「じゃあ、誰なの？」

「俺を殺した奴だよ。」

「誰？」

「……。」

「殺したとか、殺されたとか、そんな、……心当たりがあるの？」

千佳は、訝るふうに尋ね返した。

徹生は、しばらく黙っていてから何度も瞬きをして、「——ないことはない。」と呟いた。

「誰？ わたし、そんな話、知らないよ。」

「会社の警備員だよ。」

千佳は、ピクッと眉を跳ねさせて、

「……佐伯っていう人？」と問い返した。

徹生は、彼女の口からその名前が出たことに驚いた。

「そう、会社の庭でハトを蹴り殺した、……千佳、なんで知ってるの？」

千佳は、何かを言いかけて、思い直したように、

「遺体の第一発見者だったから。」と答えた。

「あいつが？」

徹生は、目を瞠った。そして、千佳の直前の表情が気になって、続きを待ったが、彼女はただ彼を見ているだけだった。

「警察は、あいつをちゃんと調べなかったの？」

「どうして？」

「どうしてって、あいつは俺を逆恨みしてたんだよ！ 死ぬちよっと前だけど、あいつは、ラグビーボールみたいに、会社の庭でハトを蹴って殺したんだよ。それを俺が注意したら、つきまとわれるようになって。——会社にも報告してる。」

「そんな話、知らなかった。」

「気味の悪い奴なんだよ、とにかく。俺はこの家の中に、あんな男のこゝろを持ち込みたくなかった。ほんのちよっとでも！ 汚れるよ！ 千佳の耳にも、璃久の耳にも触れさせたくなかった。」

徹生は、視線の落ちつく場所を探したが、見つけれなかった。そして、突然、恐ろしい想像に駆られて、

「あいつ、千佳に何か言った？」と訊いた。

千佳は、微かに首を横に振った。

「本当に？」

「でも、……それだけで、人を殺したりする？」

徹生は、千佳が曖昧に話を逸らしたのに気がついたが、訊かれたことに答えた。

「だから、気持ちが悪いんだよ！　もちろん、警察にも行って、ちゃんと調べてもらう。……第一発見者があいつだったなんて、話が出来すぎてるよ。絶対、おかしい！　警察は何やってたんだろう？」

「どこまで記憶があるの？」

徹生は、大きな溜息を吐いて、テーブルに肘を突いた。そして、改めて考えようとしたが、すぐに頭を振った。

「その日は何にも。その前から、……新商品の地ビールの缶のことで走り回ってて、……あれだよ、あの缶の上が全開して、グビグビ飲めるっていう、……」

「すぐ売れたのよ、あれ。」
徹生は、目を瞠った。

「てっちゃんが生きてたら、どんなに喜んだだろうって、秋吉さんもいつも言ってた。」

「マジで？　売れたんだ？　……そっか、……いや、出足は好調だったけど、……」

徹生は、放心したように独り言ちて、沸き上がってくる喜びに、頬を緩めた。

「良かった。あれに、すべてを注いでたから。会社は？　持ち直した？」

「会社のことまでは、わからない。」

「ああ、……そうだよね。」

徹生は頷いて、またその頃のことを思い出そうとした。

「G W のバリ旅行は？」

千佳の言葉に、彼は一瞬、眉を顰めたが、すぐに、

「ジンバルンのホテル！」と声を上げた。

千佳は、黙って二回頷くと、「……あのすぐあとよ。」と言った。

徹生は手帳を捲った。年の後半は、カレンダーが真っ白だったが、前半は対照的に真っ黒だった。日々のマス目には収まりきれない文字が、押し合い圧し合いしながらページを埋め尽くしている。

一つ一つの予定に目の焦点が合う度に、記憶の断片がちらついた。

彼はまた、九月や十月のページを開いて、そのまっさらなマス目を見つめた。——時間が止まっている。自分の時間が、世の中の時間から切り離されて、そこで静かに動かなくなっている。五月から六月へとページを捲る、その親指と人差し指で摘んだ紙一枚の感触の中に、自分の命の有無が秘められている。そのことが、彼には酷く、不思議に感じられた。

「五月十六日。」

千佳は、呟くように言った。徹生は、一旦顔を上げてから、その空白になっている日付のマス目に視線を落とした。そして、やはり人差し指で、その日に触ってみた。

それが、自分が死んだ日だった。自分がこの世界から消えてなくなってしまった日。——

彼の手がけた地ビールの発売はGW直後で、この頃にはもう、売上げの初動についての朗報が届いていた。前日は外回りをしていて、この日は、一日中会社にいたらしい。が、そのからっぽのマス目をどれほど凝視しても、何も思い出せなかった。

「……わからない。頭のどっかにまだその記憶が残ってるのかさえも。あったとして、どこにそれがあるのか。……どこを目がけて意識を集中させたいのか。完全に空白なんだよ。……」

千佳は、虚ろな目でテーブルを見ながら言った。

「わたしは、……覚えてる。その日のこと。いつもみたいに、駅のお土産物売場で、梅のお饅頭と羊羹売ってた。てっちゃんと初めて会った時みたい。……急に携帯に電話がかかってきて、出たら警察の人で。とにかくすぐに水尾署まで来て欲しいって。……即死だったからって、病院にも運ばれなくて、……わたしそのことで、すごく怒ったから。……」

徹生の脳裡には、救急隊員や警察に、無造作に扱われている自分の遺体が思い浮かんだ。映画やドラマの継ぎ接ぎらしい、そのニセモノの光景の中で、彼は目を瞑って、血を流しながら横たわっている。そこには、訃報を聞いて立ち尽くす千佳の姿も見えた。帰宅した日のように呆然としていただけなのか、パニックに陥っていたのか。……

徹生は、胸を切り裂かれるような痛みを顔に歪めた。そして、とにかく、ただ信じて欲しい一心で、まっすぐに妻の目を見据えて言った。

「千佳、……俺は自殺はしてない。俺は、そんな人間じゃない。知ってるだろう？」

「結婚して、家も買って、子供も出来て、俺にとっては、人生で一番幸せな時だった！ ウソじゃない。本当にそう感じてたんだ。本当に。そんな俺が、なんで自分で死ななきゃいけない？」

「それがわからなかったから、苦しかったんじゃない。……ずっと辛かった。わたし、もう涙、出ないの。」

「……どういうこと？」

「わからない。今だって泣いてる。でも、出ないの、涙。一滴も。」

徹生は、愕然として千佳の顔を見守った。

「わたしだって、てっちゃんが自殺するなんて夢にも思ってた。誰も想像してなかった。でも、現実として突きつけられれば、受け容れるしかないでしょう。他に何が出来る？ 責める前に教えて。」

「責めてるんじゃないよ。——責めてるんじゃない。ただ、俺を信じてほしいんだよ。俺は、妻と子供を置き去りにして、自殺するような人間じゃない。絶対に違う！ 千佳と璃久は、俺にとってこの世の中の何よりも大事なんだから。」

「そう信じてても、……自殺したって言われたら、考えるでしょう？ どうして気づいてあげられなかったのかって、……側にいた自分が情けなかった。わたしのせいかもしれないって自分でも責めたし、……自分だけじゃなくて、……」

千佳は、その先を続けることが出来なかった。

「酷いことを言われたのか、人から？」

千佳は、反射的に顔を背けて、静かに一度、目を瞑った。

「お母さんが酷いのは、今に始まったことじゃないから。でももう、いいの。てっちゃんのお葬式以来、会ってないし。」

「まったく？ この三年間？」

「いいの、もう。……いい。会いたくないから。」

徹生は、千佳のこんなに険しい表情を初めて目にした。何があっても、決して笑顔を絶やさなかったあの千佳が。……

確かに、三年経っているのだと、彼は痛感した。さもなくば、人がこんなに変わるはずがなかった。

「俺の母親は？」

千佳は、乾いたままの嗚咽で肩を震わせながら、何も答えなかった。

「責められたのか、俺のことまで？」

「仕方ないよ。……お義母さんも、母子家庭で、一人息子だったんだから、……わたしも、申しわけなくて、合わせる顔がなかった。今はもう、お義母さんとも全然連絡取ってない。」

徹生は千佳を注視したまま、

「あんなに仲良かったのに。……」と悔しそうに言った。

単に生き返ったのではなかった。自分の死が壊してしまつた世界に生き返つたのだと、彼は感じた。それを元に戻すことこそが、自分が生き返つた意味なのではないだろうか？

徹生はまだ、実家に連絡していなかった。午後10時を少し回つたところである。受話器を手にとると、彼は立ったまま、東三河の実家の番号を押した。五回呼び出し音が鳴って、声を発しようとした途端、留守電が応じた。

「あ、もしもし、徹生だけど、……あの、また掛け直すけど、……とにかく母さん！俺、生きてるから！生き返つたんだよ！……また電話する。……俺、ちゃんと生きてるから。……」

電話を切ると、徹生は元の向かい合わせの椅子ではなく、千佳の隣に座つた。そして、組み合わされた彼女の手の上に自分の手を重ねた。

「俺が死んだのは、千佳のせいなんかじゃない。違うよ！何にも自分を責めることなんかな

い。俺が言ってるんだから、間違いないよ。」

「……。」

「俺はね、……俺は今日、病院で気がついたんだよ。今年俺は、死んだ親父と同じ年になるんだ。」

俯いた千佳の目許には、髪の毛が疎らに掛かっていた。

「俺は、親父が早くに死んだせいで、経済的にも苦労したし、やっぱり寂しかった。そんな俺が、なんで璃久を同じ目に遭わせる？ あり得ないよ。俺の夢は、俺が知らなかった普通の、両親が二人揃った幸せな家庭を築くことだった。それは、千佳だってそうだっただろう？ それ俺たち二人の結婚だったんだから。——色々、難しいこともあると思うけど、もう一度、一緒に俺とやりなおしてほしい。辛い思いをさせてしまったけど、もう大丈夫だから。その分、がんばって努力する。俺はここにいますし、今度こそずっと千佳の側にいる。」

徹生は、彼女の手を握り締めて頭を垂れた。

千佳は、長い時間考えていた。そして、何度か声を発しようとしては嗚咽に妨げられて、ようやく、

「自殺じゃないなら、……良かった。生き返ってくれて、……良かった。」と言った。

徹生は、固く目を瞑ったまま、その言葉を聴いた。「……ありがとう。」

「でも、殺されたっていうのは、わからない。本当にそうなら、恐いことだけど、……」
徹生は、顔を上げた。

「突飛な話って思うかもしれないけど、事故か、自殺か、殺人かしかかないんだったら、殺された

としか俺には考えられない。自殺はない。事故もあり得ないよ。屋上なんか行く用事もないんだし、事故なら事故で、みんながそう言うはずだから。——佐伯はとにかく、異様な人間なんだよ。たったそんなことでっていう理由でも、……それは、……」

徹生は、そう言いかけたまま、自分でもどう続けていいのかわからなくなって、口を噤んだ。

千佳は、彼の手を離すと、顔にかかった髪を払いながら眉間を絞った。そして、彼の目を見て言った。

「本当にそうなら、……心配。生き返ったって知ったら、また殺しに来るかもしれない。」

徹生は、目を大きく見開いた。不意に、何か物音でもしたように、彼らはなぜか、同時に後ろを振り返った。立ち上がって、徹生は窓の外を見に行った。そして、カーテンを隙間なく閉じ合わせる、一呼吸置いてから言った。

「来るなら来るでいい。それで、俺が自殺なんかしてないことが証明されるんだから。千佳も璃久も、もう後ろ暗い思いを抱いて、生きていなくてもいい。俺たち家族は、純粋な被害者なんだから。」